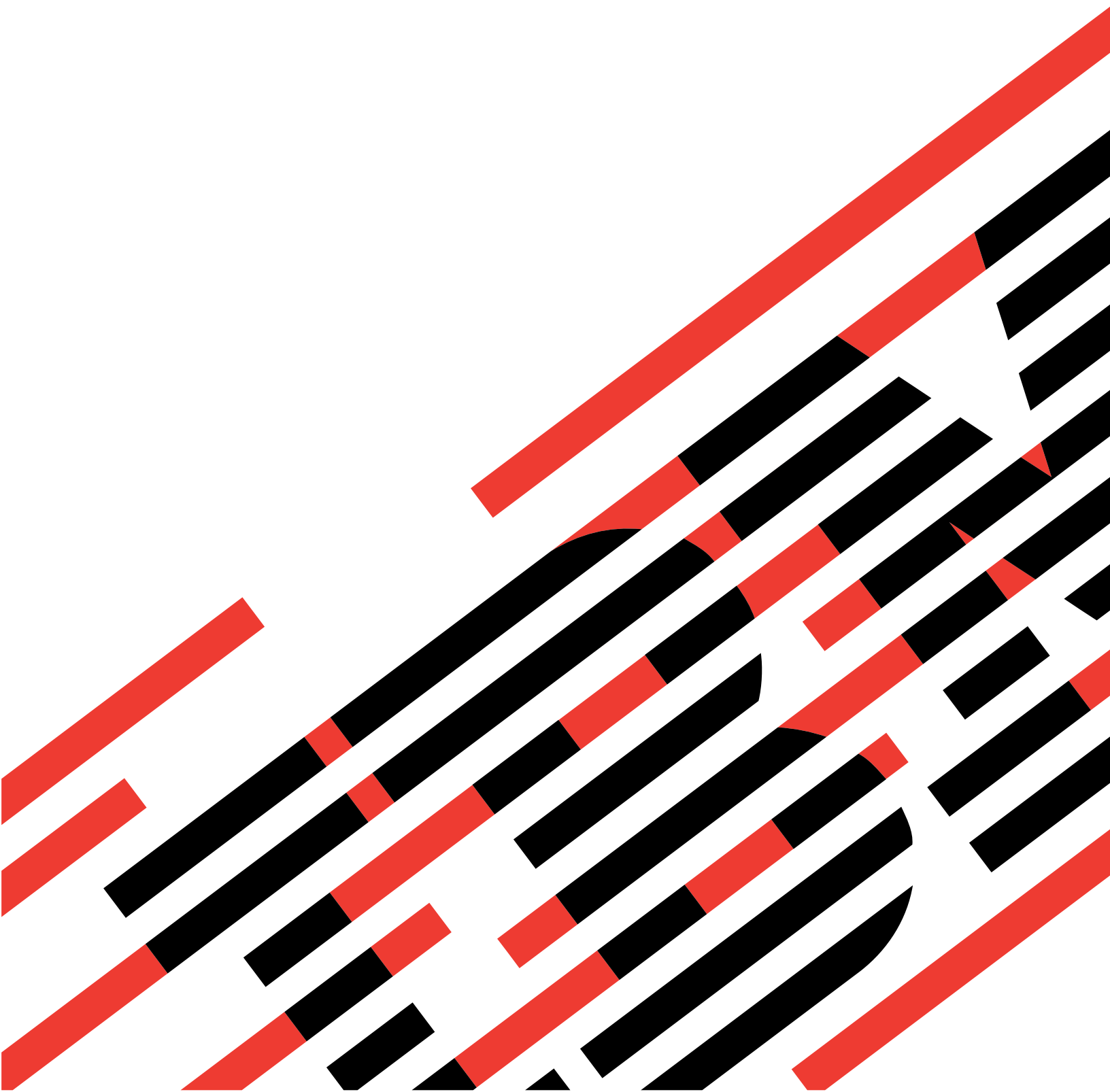


IBM

@server

iSeries

論理区画 管理





@server

iSeries

論理区画 管理

© Copyright International Business Machines Corporation 1998, 2002. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2002

目次

論理区画の管理	1
iSeries ナビゲーター、DST、および SST を使用した論理区画の管理	2
iSeries ナビゲーターの開始	4
論理区画での SST および DST の開始	5
論理区画権限	6
論理区画のセキュリティー管理	9
論理区画のシステム構成の印刷	10
論理区画のリソースの動的な移動	11
処理能力の動的な移動	11
メモリーの動的な移動	14
対話式パフォーマンスの動的な移動	15
論理区画のリソース移動のスケジュール	17
メモリー移動のスケジュール	19
専用プロセッサ移動のスケジュール	20
共用プロセッサ移動のスケジュール	21
対話式パフォーマンス移動のスケジュール	22
論理区画への新規ハードウェアのインストール	23
1 次区画への新規ソフトウェア・リリースのインストール	24
区画環境での拡張装置の移行	24
共用プロセッサ・プールを使用する区画に対する HVLPTask パフォーマンスの振る舞い	24
論理区画を持つシステムの再始動および電源遮断	26
論理区画の電源スケジュールの変更	26
1 次区画での時刻の変更	26
論理区画を持つシステムの電源遮断	27
論理区画を持つシステムの再始動	28
論理区画の操作モードの変更	29
論理区画の IPL ソースの変更	29
システム再始動時の 2 次論理区画の再始動	30
システム再始動時の 2 次論理区画の再始動の防止	31

論理区画の管理

iSeries サーバーで 1 つまたは複数の論理区画を作成する場合、互いに独立した区画を作成することになります。各論理区画には、プロセッサ、メモリー、入出力 (I/O) 装置、ライセンス内部コード、オペレーティング・システム (OS/400)、およびオプションのソフトウェア・アプリケーションなどの、それぞれ独立した構成が含まれます。

論理区画の管理には、iSeries ナビゲーターを使用できます。ユーザーが実行するほとんどのタスクは、システムの他の論理区画から独立して行えます。つまり、各論理区画は独立したシステムと同じように扱う必要があります。

論理区画についての追加情報が必要な場合は、「論理区画の概念」を参照してください。システムのバックアップについて詳しくは、「バックアップおよび回復」を参照してください。もう一つの情報源として「iSeries システム操作の基本」があり、システムの開始および管理についての追加情報が説明されています。

- 『**iSeries ナビゲーター、DST、および SST を使用した論理区画の管理**』
DST および SST とともに iSeries ナビゲーターを使用して論理区画を管理する方法が説明されています。論理区画タスクを実行するために必要な権限を判別してください。
- 『**論理区画のセキュリティ管理**』
論理区画タスクを実行する権限を持つのは誰か、およびシステムへのアクセスを制限する方法が説明されています。
- 『**論理区画のシステム構成の印刷**』
DST または SST を使用して、ハードウェア構成のコピーを印刷します。
- 『**論理区画のリソースの動的な移動**』
区画やシステムの再始動をすることなく、区画間でプロセッサ、メモリー、および対話式パフォーマンスを移動する方法が説明されています。
- 『**論理区画のリソース移動のスケジュール**』
メモリー、プロセッサ、対話式パフォーマンス、および入出力プロセッサの移動のスケジュール方法が説明されています。
- 『**論理区画への新規ハードウェアのインストール**』
論理区画を持つシステムにハードウェアをインストールするときの規則が説明されています。
- 『**1 次区画への新規ソフトウェア・リリースのインストール**』
1 次区画についてのメモリー要件が説明されています。
- 『**区画環境での拡張装置の移行**』
区画に分割された 8xx または 270 iSeries サーバー上で、拡張装置を移行する方法が説明されています。
- 『**共用プロセッサ・プールを使用する区画に対する HVLPTask パフォーマンスの振る舞い**』
HVLPTask によって報告される CPU 時間が、区画のパフォーマンスに影響を与えない理由が説明されています。
- 『**論理区画を持つシステムでの修正のインストール**』
マネージメント・セントラルを使用して、修正 (またはプログラム一時修正、PTF) をインストールする基本ステップが説明されています。
- 『**オペレーション・コンソールのマイグレーションの計画**』
計画情報を使用して、あるオペレーション・コンソールから別のオペレーション・コンソールへのマイグレーションを行います。

- 『論理区画を持つシステムの再始動および電源遮断』

論理区画を持つシステムを安全に、再始動および電源遮断する方法が説明されています。

iSeries ナビゲーター、DST、および SST を使用した論理区画の管理

論理区画のないシステムでは、コントロール・パネルを使用して多くのタスクを実行することができます。しかし、論理区画があるシステムの場合、2 次区画には物理的コントロール・パネルがありません。2 次区画を制御するためには、リモート・コントロール・パネルのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用します。

論理区画に関するリモート・コントロール・パネルの使用方法については、『コントロール・パネル機能』を参照してください。

セキュリティに関する考慮事項

iSeries ナビゲーター、専用保守ツール (DST)、およびシステム保守ツール (SST) で論理区画情報にアクセスしたいユーザーは、論理区画機能に対する操作権限または管理権限のいずれかが必要です。さらに、PC から 2 次区画のオペレーション・コンソール・リモート・パネルを使用するユーザーは、リモート・パネル権限も必要です。

区画制御のための適切な保守ツール権限を管理する際は、十分な注意が必要です。保守ツールのセキュリティ管理についての詳細は、『保守ツール・ユーザー ID』を参照してください。

iSeries ナビゲーター

iSeries ナビゲーターは、iSeries サーバーの構成、モニター、および管理を行うために使用するグラフィカル・ユーザー・インターフェースです。iSeries ナビゲーターは、iSeries Access for Windows と一緒にパッケージされており、使用するのに iSeries Access のライセンスは必要ありません。

iSeries ナビゲーターにはグラフィカル・ウィザードが含まれており、これを使用して論理区画を作成し、簡単に構成および管理することができます。また、プロセッサ、メモリー、対話式パフォーマンス、入出力プロセッサや、新規の共用プロセッサ・プールを持つ共用プロセッサを動的に移動することができます。さらに、仮想 OptiConnect、仮想イーサネット、および HSL OptiConnect を使用可能または使用不可にしたり、システムを再始動することなく、システム・バスの状況を専用モードまたは共用モードに変更したりすることもできます。それぞれの論理区画機能と共に、iSeries ナビゲーターは、各タスクに対応する詳細なヘルプ・テキストを用意しています。詳しくは『iSeries ナビゲーター』を参照してください。

iSeries ナビゲーターと DST/SST 機能

論理区画機能のなかには、文字ベースのインターフェース画面による DST および SST を使用する必要のあるものがあります。たとえば、論理区画回復アクションおよびシステム構成の印刷タスクは、DST 機能および SST 機能からのみアクセス可能です。ただし、SST の方が DST よりもアクセスしやすいので、これらのタスクにアクセスするときはできるだけ SST を使用してください。

文字ベースのインターフェース画面による SST または DST の開始については、『SST および DST の開始』を参照してください。

次の表は、iSeries ナビゲーターまたは、DST および SST を使用する場合に論理区画に関して選択可能な機能を説明しています。

機能	iSeries ナビゲーター	DST および SST
論理区画の IPL 装置としてのディスク装置の受け入れ		X
バス所有権タイプの変更	X	X
デフォルトのエレクトロニック支援リソースの変更	X	X
区画名の変更	X	X
通信オプションの変更	X	X
1 次区画および 2 次区画の入出力構成の変更	X	X
論理区画の操作モードの変更	X	X
代替 IPL 装置の変更	X	X
ゲスト区画のホスト情報の変更	X	X
区画タイプの変更	X	X
ゲスト区画の IPL ソース・コマンド行パラメーターの変更	X	X
論理区画の再始動 (または IPL) ソースの変更	X	X
論理区画の非報告リソースの消去	X	X
論理区画の区画構成データの消去	X	X
非構成ディスク装置の区画構成の消去		X
新規 OS/400 論理区画の作成	X	X
ゲスト区画の作成	X	X
IPL ソース間での区画構成データのコピー		X
論理区画の削除	X	X
すべての論理区画構成データの削除	X	
使用可能なハードウェア・リソースの表示	X	X
システム・リソースの表示	X	X
論理区画の通信オプションの表示	X	X
区画のコンソールの表示	X	X
論理区画 OS/400 リリース・レベルの表示	X	X
区画のオペレーティング・システム・タイプの表示	X	X
区画 ID の表示	X	X
PCI 情報の表示	X	X
論理区画のリモート・コントロール・パネルの表示	X	X
1 次区画のシステム参照コード・履歴の表示	X	
2 次区画のシステム参照コード・履歴の表示	X	X
対話式パフォーマンスの動的な移動	X	X
入出力プロセッサの動的な移動	X	X
メモリーの動的な移動	X	X
プロセッサの動的な移動	X	X
高速リンク (HSL) OptiConnect の使用可能化	X	X
仮想イーサネット通信の使用可能化	X	X
仮想 OptiConnect 通信の使用可能化	X	X
リソースの論理アドレスの検出	X	X
専用プロセッサの移動	X	X
専用プロセッサの共用プロセッサ・プールへの移動	X	X

機能	iSeries ナビゲーター	DST および SST
入出力プロセッサの移動	X	X
対話式パフォーマンス、メモリーまたは共用処理能力の移動	X	X
IOP に割り当て済みの IOA の、ゲスト区画への移動	X	X
ゲスト区画への IOA の移動	X	X
OS/400 区画に割り当て済みの IOA の移動	X	X
論理区画を持つサーバーでの主記憶域ダンプの実行	X	X
システム再始動時の 2 次論理区画の再始動の防止	X	X
論理区画のシステム構成の印刷		X
論理区画構成データの回復	X	X
論理区画を持つディスク装置入出力プロセッサのリセット		X
システム再始動時の 2 次論理区画の再始動		X
論理区画を持つシステムの再始動	X	X
すべての論理区画構成データの復元	X	
すべての論理区画構成データの保管	X	
専用プロセッサ移動のスケジュール	X	
対話式パフォーマンス移動のスケジュール	X	
入出力プロセッサ移動のスケジュール	X	
メモリー移動のスケジュール	X	
共用プロセッサ移動のスケジュール	X	
構成データの更新	X	X
論理区画でのリモート保守の使用	X	X
論理区画の状況の表示	X	X

iSeries ナビゲーターの開始

iSeries ナビゲーターは、iSeries Access for Windows の一部として組み込まれています。ユーザーの PC が iSeries ナビゲーターの要件を満たしているか確認するには、ハードウェア要件およびソフトウェア要件を参照してください。PC への iSeries ナビゲーターのインストールについて詳しくは、『iSeries ナビゲーター』を参照してください。

iSeries ナビゲーターに加えて、iSeries Access のオペレーション・コンソールをインストールすることもできます。オペレーション・コンソールを使用すると、ケーブルでの直接接続、LAN 接続またはリモートの PC を使用して、iSeries コンソールおよび論理区画のリモート・コントロール・パネルにアクセスし、制御することができます。

Windows デスクトップの「iSeries ナビゲーター」アイコンをダブルクリックすると、iSeries ナビゲーターを開始することができます。iSeries 接続を作成したいかどうかを尋ねるプロンプトが出された場合は、「はい」をクリックして、「接続」ウィザードの指示に従ってください。iSeries ナビゲーターを使用するには、操作権限または管理権限を持っていないければなりません。

論理区画での SST および DST の開始

1 次区画または 2 次区画での SST の開始

SST または DST を開始する前に、保守ツールのユーザー ID を構成しておく必要があります。ユーザー ID を構成する方法については、『論理区画権限』を参照してください。

OS/400 コマンド行でシステム保守ツール開始 (STRSST) コマンドを入力し、Enter キーを押すと、システム保守ツール (SST) を開始することができます。1 次区画または 2 次区画用のコンソールで SST を開始できます。

1 次区画の DST を開始する

専用保守ツール (DST) を開始するときは、ジョブが異常終了しないように、1 次区画コンソールがサインオン画面にあるときに実行するようにしてください。または、論理区画で次のステップを実行して開始することもできます。初期プログラム・ロード (IPL) 中にシステムが変更を保管するので、これらのステップを実行する必要があるのは一度だけです。

1. iSeries ナビゲーターで、「ユーザー接続」を展開します。
2. 処理する物理システムを選択します。
3. 「構成およびサービス」を展開し、「システム値」を選択します。
4. 「装置」および「回復」タブを選択します。
5. 「ジョブを終了して、QHST ログにメッセージを送信します」を選択し「ジョブ・ログの作成」ボックスを選択解除する (ENDJOBNO LIST) か、あるいは「ジョブを終了して、QHST ログにメッセージを送信します」を選択し「ジョブ・ログの作成」ボックスを選択します (ENDJOB)。

「タイムアウト間隔 (QDSCJOBITV)」を設定するために、次のステップを実行します。

1. iSeries ナビゲーターで、「ユーザー接続」を展開します。
2. 処理する物理システムを選択します。
3. 「構成およびサービス」を展開し、「システム値」を選択します。
4. 「ジョブ」および「対話式ジョブ」タブを選択します。
5. 「ジョブを切断」を選択し、システム値を 5 分に設定します。

iSeries ナビゲーターでのシステム値の使用方法については、『OS/400 システム値』を参照してください。

1 次区画の DST を開始するには、コントロール・パネルを使用してシステムを手動モードに設定し、オプション 21 を選択します。システムによりユーザーの ID およびパスワード入力のプロンプトが表示されます。ID およびパスワードの入手については、『保守ツール・ユーザー ID の構成』を参照してください。

1 次区画の DST から 2 次区画の DST を開始する

2 次区画の DST を開始するには、次のステップに従ってください。

1. 1 次区画で DST を開始します。
2. オプション 11「システム区画の処理」を選択します。
3. オプション 2「区画状況の処理」を選択します。
4. カーソルを使って、DST を開始する 2 次区画を選択します。
5. 2 次区画が手動モードではない場合、オプション 10「モード手動」を選択します。
6. F23 を押して、さらにオプションを選択します。

7. オプション 21「専用保守ツールの強制実行」を選択します。2 次区画コンソールで、装置が入出力エラーとなり異常終了しますが、これは正常な結果です。
8. ワークステーションに DST の画面が表示され、2 次区画のコンソールとして使用できます。DST にサインオンします。
9. 次回の IPL を不在で実行する必要がある場合には、DST を終了する前に、2 次区画を通常モードに戻します。

SST から DST を強制開始する

論理区画が保護モードではない場合、SST から DST を強制開始できます。1 次区画では、1 次区画の DST または 2 次区画の DST を強制開始することができます。2 次区画では、2 次区画自身の DST を開始することができます。

SST の「区画状況の処理」画面から DST を強制開始すると、区画コンソール上の現行ジョブは取り消されます。

重要: DST を終了する前に論理区画で IPL を実行すると、次回の OS/400 の IPL が正常に行われなくなります。OS/400 の IPL の異常を防ぐには、IPL を実行する前に DST を終了します。次に、その論理区画にサインオンし、IPL を実行します。

これらのステップは、DST を開始する際、システムがアクティブなジョブ (システム区画の保守機能を含む) を停止させる方法に影響します。5 分間待ってから、オプション 21 を入力したときに SST でアクティブになっていた、DST の保守機能を開始してください。

SST から DST を強制開始するには、次のステップに従ってください。

1. STRSST コマンドを使用して、SST を開始します。
2. オプション 5「システム区画の処理」を選択します。
3. オプション 2「区画状況の処理」を選択します。
4. カーソルを使って、DST を開始する論理区画を選択します。
5. 区画が手動モードではない場合、オプション 10「モード手動」を選択します。
6. オプション 21「DST の強制実行」を選択します。DST が必要な論理区画ワークステーションから DST を強制開始すると、ワークステーションでは、装置が入出力エラーとなり異常終了しますが、これは正常な結果です。
7. DST にサインオンします。
8. 次回の IPL を不在で実行する必要がある場合には、DST を終了する前に、論理区画を通常モードに戻します。

論理区画権限

保守ツール・ユーザーに認可する権限によって、それらのユーザーがどの論理区画情報にアクセスできるか、また、どのタスクを実行できるかが決定されます。保守ツール・ユーザーに区画セキュリティーを管理するプロファイル特権を割り当てるときには、リスクを最小限にとどめるための十分な注意が必要です。

論理区画に関連する保守ツール機能特権は 2 つあります。これらの特権により、基本操作または高度な管理がサポートされます。

ユーザーに論理区画の**操作権限**を認可するには、次のステップを実行します。

1. QSECOFR か、または保守ツールのセキュリティー特権を持つその他のユーザー ID で、DST を開始します。
2. オプション 5「DST 環境の処理」を選択します。
3. オプション 3「保守ツール・ユーザー ID」を選択します。
4. オプション 1「作成」を選択して新規ユーザー・プロファイルを作成するか、オプション 7「特権の変更」を選択して既存のユーザーを調整します。
5. システム区画操作特権が認可されていることを確認します。

ユーザーに論理区画の**管理権限** (すべての操作タスクを使用可能にする) を認可するには、次のステップを実行します。

1. QSECOFR か、または保守ツールのセキュリティー特権を持つその他のユーザー ID で、DST を開始します。
2. オプション 5「DST 環境の処理」を選択します。
3. オプション 3「保守ツール・ユーザー ID」を選択します。
4. オプション 1「作成」を選択して新規ユーザー・プロファイルを作成するか、オプション 7「特権の変更」を選択して既存のユーザーを調整します。
5. システム区画**管理**特権が認可されたことを確認します。

次の表は、論理区画タスクを実行するためにどの権限が必須かを説明しています。

機能	管理権限	操作権限
論理区画の IPL 装置としてのディスク装置の受け入れ	X	
バス所有権タイプの変更	X	
デフォルトのелектロニック支援リソースの変更	X	X
区画名の変更	X	X
使用中リソースの通信オプションの変更 (強制)	X	
使用中でないリソースの通信オプションの変更	X	X
1 次区画および 2 次区画の入出力構成の変更	X	X
論理区画の操作モードの変更	X	X
論理区画の代替 IPL 装置の変更	X	X
ゲスト区画のホスト情報の変更	X	X
区画タイプの変更	X	
ゲスト区画の IPL ソース・コマンド行パラメーターの変更	X	X
論理区画の IPL 装置の変更	X	X
論理区画の非報告リソースの消去	X	
非構成ディスク装置の区画構成の消去	X	
IPL 装置間での区画構成データのコピー	X	
新規論理区画の作成	X	
ゲスト区画の作成	X	
論理区画の削除	X	
すべての論理区画構成データの削除	X	X
使用可能なハードウェア・リソースの表示	X	X
論理区画の通信オプションの表示	X	X

機能	管理権限	操作権限
区画のコンソールの表示	X	X
論理区画 OS/400 リリース・レベルの表示	X	X
区画のオペレーティング・システム・タイプの表示	X	X
区画 ID の表示	X	X
PCI 情報の表示	X	X
論理区画のリモート・コントロール・パネルの表示	X	X
論理区画のシステム参照コード・ヒストリーの表示	X	X
システム・リソースの表示	X	X
対話式パフォーマンスの動的な移動	X	X
入出力プロセッサの動的な移動	X	X
メモリーの動的な移動	X	X
プロセッサの動的な移動	X	X
論理区画の仮想イーサネット通信の使用可能化	X	X
リソースの論理アドレスの検出	X	X
専用プロセッサの移動	X	X
専用プロセッサの共用プロセッサ・プールへの移動	X	X
使用中のリソースを持つ入出力プロセッサの移動 (強制)	X	
使用中でないリソースを持つ入出力プロセッサの移動	X	X
対話式パフォーマンス、メモリーまたは共用処理能力の移動	X	X
入出力プロセッサに割り当て済みである入出力アダプターのゲスト区画への移動	X	X
入出力アダプターのゲスト区画への移動	X	X
OS/400 区画に割り当て済みの入出力アダプターの移動	X	X
論理区画を持つサーバーでの主記憶域ダンプの実行	X	X
システム再始動時の 2 次論理区画の再始動の防止	X	X
論理区画のシステム構成の印刷	X	X
論理区画構成データの回復	X	
論理区画を持つディスク装置入出力プロセッサのリセット	X	X
システム再始動時の 2 次論理区画の再始動		X
論理区画を持つシステムの再始動	X	X
すべての論理区画構成データの復元	X	X
すべての論理区画構成データの保管	X	X
専用プロセッサ移動のスケジュール	X	X
対話式パフォーマンス移動のスケジュール	X	X
入出力プロセッサ移動のスケジュール	X	X
メモリー移動のスケジュール	X	X
共用プロセッサ移動のスケジュール	X	X
すべての論理区画の区画構成データの更新	X	
論理区画でのリモート・サービスの使用	X	X
論理区画の状況の表示	X	X

LAN でオペレーション・コンソール・リモート・パネルを使用するには、1 次区画の区画リモート・パネル **XXXXXXXX nnn** 属性を持つ装置プロファイルが必要です。XXXXXXXX はターゲット区画名で、nnn は数字の区画 ID です。リモート・パネルを使用する権限をユーザーに認可するには、次のステップを実行します。

1. QSECOFR か、または保守ツールのセキュリティー特権を持つその他のユーザー ID で、DST を開始します。
2. オプション 5「DST 環境の処理」を選択します。
3. オプション 5「保守ツール装置 ID」を選択します。
4. オプション 1「作成」を選択して新規装置プロファイルを作成するか、オプション 7「特権の変更」を選択して既存の装置を調整します。
5. 該当する区画の区画リモート・パネル属性が、認可されていることを確認します。

この装置プロファイルによって、PC のリモート・コンソール・グラフィカル・ユーザー・インターフェースからパネル機能が使用可能になります。すべてのユーザーが有効な保守ツール・ユーザー・プロファイルを持つ必要があります。ほとんどの機能の場合、パネルを使用するのに特別な特権は必要はありません。ただし、パネル・キー位置 (手動、通常、自動、または保護) を変更する場合、ユーザーは 1 次区画に、区画リモート・パネル・キー **XXXXXXXX nnn** 属性を持つ保守ツール・ユーザー・プロファイルが必要です。XXXXXXXX はターゲット区画名で、nnn は数字の区画 ID です。キーを変更する権限をユーザーに認可するには、次のステップを実行します。

1. QSECOFR か、または保守ツールのセキュリティー特権を持つその他のユーザー ID で、DST を開始します。
2. オプション 5「DST 環境の処理」を選択します。
3. オプション 3「保守ツール・ユーザー ID」を選択します。
4. オプション 1「作成」を選択して新規ユーザー・プロファイルを作成するか、オプション 7「特権の変更」を選択して既存のユーザーを調整します。
5. 該当する区画の区画リモート・パネル・キー属性が、認可されていることを確認します。

保守ツールのユーザー ID についての追加情報は、『保守ツール・ユーザー ID』を参照してください。

論理区画のセキュリティー管理


区画システムで実行するセキュリティー関連タスクの大半は、論理区画のないシステムでのタスクと同じです。しかし、論理区画を作成するときには、複数の独立したシステムで作業します。したがって、論理区画のないシステムでは 1 回だけ実行すればよいタスクを、論理区画のあるシステムでは、論理区画ごとに同じタスクを実行する必要があります。

論理区画でのセキュリティー実行の際には、次の基本ルールに注意してください。

- iSeries ナビゲーターの論理区画機能にアクセスするためには、まず保守ツール・サーバーを構成する必要があります。保守ツール・サーバーについて詳しくは、『保守ツール・サーバーの構成』を参照してください。
- 論理区画の操作権限または管理権限を実行するユーザーは、1 次区画に保守ツール・ユーザー・プロファイルが必要です。詳細は、『論理区画権限』を参照してください。
- 1 回に 1 つの論理区画について、システムにユーザーを追加します。アクセスする論理区画ごとにユーザーを追加する必要があります。
- 区画から別の論理区画のメモリーおよびディスク装置を参照および使用することはできません。
- 区画は、所有するハードウェア・リソースだけを参照できます。

- iSeries ナビゲーターの論理区画機能では、1 次区画で「すべてのハードウェア」を選択して、「区画の構成」ウィンドウにすべてのハードウェア・リソースを表示することができます。2 次区画から使用するときは、その区画に割り当てられたリソースだけ表示可能です。いずれの区画でも、情報を表示するには論理区画の操作権限または管理権限が必要です。
- システム・コントロール・パネルで 1 次区画を制御します。リモート・コントロール・パネルは、サーバーのすべての区画を制御します。区画が保護に設定されているときは、システム・パネル、リモート・コントロール・パネル、または SST の「区画状況の処理 (Work with Partitions Status)」画面からアクションを実行することはできません。システム・コントロール・パネルまたはリモート・コントロール・パネルから DST を強制開始するには、手動モードに変更する必要があります。
 - リモート・コントロール・パネルを使用して、区画を電源オンおよび電源オフすることができます。
 - リモート・コントロール・パネルを使用して、2 次区画のモードを、保護からその他の値に設定できます。

2 次区画のモードが保護モードでなくなれば、リモート・コントロール・パネルを使用して、区画状況を変更することができます。

iSeries サーバーでのセキュリティーについては、「iSeries 機密保護解説書」 を参照し、セキュリティーの追加情報については『基本システム・セキュリティーおよび計画』を参照してください。

論理区画のシステム構成の印刷

セットアップが完了したら、すべての論理区画に割り振られたすべての I/O リソースのシステム構成を印刷することを強くお勧めします。論理区画構成情報は保管処理時に保管されないため、災害時回復シナリオでシステムを回復する必要がある場合に適切なリソースを割り振るには、印刷出力が必要になります。

また、論理区画を持つシステムのハードウェア・アップグレードとも呼ばれている、MES (各種装置仕様: Miscellaneous Equipment Specification) を行う必要がある場合にも、すべての論理区画のシステム構成報告書を印刷することが必要になります。この情報は、IBM ビジネス・パートナーや IBM 営業担当員が、システム入出力リソースがどのように論理区画に割り当てられているかを理解するときに役立ちます。

重要: SST 内のハードウェア保守管理機能からラック構成リストを印刷しても、その特定の区画に割り振られているリソースの構成リストだけしか提供されません。この報告書では、システム全体の詳細は提供されません。この理由から、1 次区画を使用して、以下に概略を示すステップを使用する必要があります。

システム構成を印刷するには、次のステップに従ってください。

1. 1 次区画から、SST または DST を開始します。
2. SST からオプション 5「システム区画の処理」を選択するか、DST からオプション 11「システム区画の処理」を選択して、Enter キーを押します。
3. オプション 1「区画情報の表示」を選択します。
4. オプション 5「入出力資源の表示」を選択します。
5. 「表示する詳細のレベル」フィールドで、*ALL と入力して、詳細のレベルを「すべて」に設定します。
6. F6 を押して、システム入出力構成を印刷します。
7. オプション 1 を選択してから Enter キーを押して、スプール・ファイルに印刷します。
8. F12 を押して「区画情報の表示」画面に戻ります。
9. オプション 2「区画処理構成の表示」を選択します。

10. F6 を押して、処理構成を印刷します。
11. F12 を押して「区画情報の表示」画面に戻ります。
12. オプション 7「通信オプションの表示」を選択します。
13. F6 を押して、通信構成を印刷します。
14. オプション 1 を選択してから Enter キーを押して、スプール・ファイルに印刷します。
15. OS/400 のコマンド行に戻り、これらの 3 つのスプール・ファイルを印刷します。

論理区画のリソースの動的な移動

リソースの動的な移動により、区画やシステムの再始動をすることなく、区画間でプロセッサ、メモリー、および対話式パフォーマンスを移動することができます。この機能拡張のすべての利点を利用するには、1 次区画および 2 次区画で V5R1 または V5R2 が実行されている必要があります。

特定の論理区画リソースの移動について、詳しくは以下の項目を参照してください。

- 処理能力の動的な移動
- メモリーの動的な移動
- 対話式パフォーマンスの動的な移動

処理能力の動的な移動

プロセッサ能力を動的に移動する機能は、変化するワークロードに対し調整の必要がある場合に重要となります。各プロセッサには、最大値および最小値が関連付けられています。これらの値を使用することにより、論理区画を再始動することなくリソースを動的に移動可能な範囲を設定することができます。最小値は、区画を再始動するために必要な値を決定します。最小値ゼロは有効です。プロセッサまたは処理装置がゼロである区画は機能しません。

共用プロセッサおよび専用プロセッサの両方について、論理区画をサポートするために必要な処理能力の最少量に等しい最小値を指定できます。最大値は、システム上で使用可能な処理能力の量よりも小さくなければなりません。最小値または最大値を変更する場合には、区画全体を再始動する必要があります。最小値がすべての論理区画に対し満たされない場合は、1 次区画のみが再始動されます。

「マネージメント・セントラル」を使用して、ある論理区画の専用プロセッサを別の論理区画に移動するには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「マネージメント・セントラル」を展開します。
2. 「区画があるシステム」を展開します。
3. 処理する論理区画がある物理システムを選択します。
4. 論理区画を右マウス・ボタンでクリックし、「区画の構成」を選択します。ここからは「論理区画の構成」ウィンドウでの作業となります。
5. 専用プロセッサを移動する移動元の区画を選択します。
6. 「専用プロセッサ」を右マウス・ボタンでクリックし、「移動」を選択します。
7. 移動する専用プロセッサの数を「移動する量」で指定します。この値は、現在その論理区画が持つプロセッサの数よりも小さくなければなりません。移動元と移動先の両方の区画に対する「移動後」の値は、専用プロセッサのために指定された最小値/最大値の範囲内に収める必要があります。また、専用プロセッサを使用中の任意の論理区画は最低 1 つの専用プロセッサを持つ必要があります。
8. 専用プロセッサを受け取る区画を「移動先—論理区画」で選択します。
9. 「OK」をクリックして、指定した専用プロセッサを移動します。

「ユーザー接続」を使用して、ある論理区画の専用プロセッサを別の論理区画に移動するには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「ユーザー接続」またはご使用のアクティブな環境を展開します。
2. システムの 1 次区画を選択します。
3. 「構成およびサービス」を展開し、「論理区画」を選択します。
4. 「論理区画」を右マウス・ボタンでクリックし、「区画の構成」を選択します。ここからは「論理区画の構成」ウィンドウでの作業となります。
5. 専用プロセッサを移動する移動元の区画を選択します。
6. 「専用プロセッサ」を右マウス・ボタンでクリックし、「移動」を選択します。
7. 移動する専用プロセッサの数を「移動する量」で指定します。この値は、現在その論理区画が持つプロセッサの数よりも小さくなければなりません。移動元と移動先の両方の区画に対する「移動後」の値は、専用プロセッサのために指定された最小値/最大値の範囲内に収める必要があります。また、専用プロセッサを使用中の任意の論理区画は最低 1 つの専用プロセッサを持つ必要があります。
8. 専用プロセッサを受け取る区画を「移動先—論理区画」で選択します。
9. 「OK」をクリックして、指定した専用プロセッサを移動します。

「保守ツール」ウィンドウを使用して、ある論理区画の専用プロセッサを別の論理区画に移動するには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「ユーザー接続」またはご使用のアクティブな環境を選択します。
2. タスクパッド・ウィンドウの「iSeries ナビゲーター保守ツール」ウィンドウをオープンします。」を選択します。タスクパッド・ウィンドウが表示されない場合は、「表示」、「タスクパッド」と選択します。
3. 接続したい保守ツールのネットワーク・インターフェースの IP アドレスを入力します。「OK」をクリックします。
4. 保守ツールのユーザー ID およびユーザー・パスワード を入力するためのプロンプトが出されます。
5. システム名を展開し、「論理区画」を選択します。
6. 論理区画を右マウス・ボタンでクリックし、「区画の構成」を選択します。ここからは「論理区画の構成」ウィンドウでの作業となります。
7. 専用プロセッサを移動する移動元の区画を選択します。
8. 「専用プロセッサ」を右マウス・ボタンでクリックし、「移動」を選択します。
9. 移動する専用プロセッサの数を「移動する量」で指定します。この値は、現在その論理区画が持つプロセッサの数よりも小さくなければなりません。移動元と移動先の両方の区画に対する「移動後」の値は、専用プロセッサのために指定された最小値/最大値の範囲内に収める必要があります。また、専用プロセッサを使用中の任意の論理区画は最低 1 つの専用プロセッサを持つ必要があります。
10. 専用プロセッサを受け取る区画を「移動先—論理区画」で選択します。
11. 「OK」をクリックして、指定した専用プロセッサを移動します。

「マネージメント・セントラル」を使用して、ある論理区画の共用処理能力を別の論理区画に移動するには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「マネージメント・セントラル」を展開します。
2. 「区画があるシステム」を展開します。
3. 処理する論理区画がある物理システムを選択します。

4. 論理区画を右マウス・ボタンでクリックし、「**区画の構成**」を選択します。ここからは「論理区画の構成」ウィンドウでの作業となります。
5. 共用処理能力を移動する移動元の区画を選択します。
6. 「**共用プール・プロセッサ**」を右マウス・ボタンでクリックし、「**移動**」を選択します。
7. 「**プロセッサ・プール内の装置を表示 (Display units in — Processor pool)**」で処理を行う装置を選択します。このフィールドについて詳細が必要な場合は、「**ヘルプ**」をクリックします。
8. 移動する共用処理能力の数を「**移動する量**」で指定します。この値は、現在その論理区画で使用可能な共用処理能力の数よりも小さくなければなりません。移動元の「**移動後**」の値は、共用処理能力のために指定された最小値/最大値の範囲内に収める必要があります。
9. プロセッサを受け取る区画を「**移動先—論理区画**」で選択します。
10. 「**OK**」をクリックして、指定した共用処理能力を移動します。

「ユーザー接続」を使用して、ある論理区画の共用処理能力を別の論理区画に移動するには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「**ユーザー接続**」またはご使用のアクティブな環境を展開します。
2. システムの 1 次区画を選択します。
3. 「**構成およびサービス**」を展開し、「**論理区画**」を選択します。
4. 「**論理区画**」を右マウス・ボタンでクリックし、「**区画の構成**」を選択します。ここからは「論理区画の構成」ウィンドウでの作業となります。
5. 共用処理能力を移動する移動元の区画を選択します。
6. 「**共用プール・プロセッサ**」を右マウス・ボタンでクリックし、「**移動**」を選択します。
7. 「**プロセッサ・プール内の装置を表示 (Display units in — Processor pool)**」で処理を行う装置を選択します。このフィールドについて詳細が必要な場合は、「**ヘルプ**」をクリックします。
8. 移動する共用処理能力の数を「**移動する量**」で指定します。この値は、現在その論理区画で使用可能な共用処理能力の数よりも小さくなければなりません。移動元の「**移動後**」の値は、共用処理能力のために指定された最小値/最大値の範囲内に収める必要があります。
9. プロセッサを受け取る区画を「**移動先—論理区画**」で選択します。
10. 「**OK**」をクリックして、指定した共用処理能力を移動します。

「保守ツール」ウィンドウを使用して、ある論理区画の共用処理能力を別の論理区画に移動するには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「**ユーザー接続**」またはご使用のアクティブな環境を選択します。
2. タスクパッド・ウィンドウの「**iSeries ナビゲーター保守ツール**」ウィンドウをオープンします。」を選択します。タスクパッド・ウィンドウが表示されない場合は、「**表示**」、「**タスクパッド**」と選択します。
3. 接続したい保守ツールのネットワーク・インターフェースの **IP アドレス**を入力します。「**OK**」をクリックします。
4. **保守ツールのユーザー ID およびパスワード**を入力するためのプロンプトが出されます。
5. システム名を展開し、「**論理区画**」を選択します。
6. 論理区画を右マウス・ボタンでクリックし、「**区画の構成**」を選択します。ここからは「論理区画の構成」ウィンドウでの作業となります。
7. 共用処理能力を移動する移動元の区画を選択します。
8. 「**共用プール・プロセッサ**」を右マウス・ボタンでクリックし、「**移動**」を選択します。

9. 「プロセッサ・プール内の装置を表示 (Display units in — Processor pool)」で処理を行う装置を選択します。このフィールドについて詳細が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。
10. 移動する共用処理能力の数を「移動する量」で指定します。この値は、現在その論理区画で使用可能な共用処理能力の数よりも小さくなければなりません。移動元の「移動後」の値は、共用処理能力のために指定された最小値/最大値の範囲内に収める必要があります。
11. プロセッサを受け取る区画を「移動先論理区画 (Move to — Logical partition)」で選択します。
12. 「OK」をクリックして、指定した共用処理能力を移動します。

メモリーの動的な移動

各論理区画のメモリーは、割り当てられた最小値から最大値までの範囲内で動作します。メモリー移動の要求が、区画作成の際に指定された最小値と最大値の範囲内である限り、影響のある区画を再始動することなく論理区画間でメモリーを動的に移動することができます。

区画間での動的なメモリー移動を要求する場合、このメモリーは各区画の基本メモリー・プール (*BASE プール) で除去および追加されることに注意してください。専用メモリー・プールまたは共用メモリー・プールは影響を受けません。移動の要求が基本プールで使用可能なメモリー量を超える場合、システムは、基本プールに必要な最小メモリー量を確保してから、超過した分のメモリー・ページのみを解放します。この値は、基本記憶域プール最小サイズ (QBASPOOL) システム値によって決まります。メモリー移動の際のデータ損失を防ぐために、メモリー・ページを別の区画に対して利用可能にする前に、システムはまずそのメモリー・ページからのデータをすべてディスクに書き込みます。移動を要求したメモリーの量によっては、この作業にかなりの時間がかかることがあります。

それぞれの区画について、実行時の最小メモリー・サイズが報告されます。この値は、その区画内にロックされ、動的に移動できない区画のメモリー量の見積もりです。区画内のプロセスやスレッドの数を削減したり *BASE プールを変更したりすると、実行時の最小値に影響が出ます。

論理区画に割り当てたメモリー容量すべてが区画に利用できるわけではありません。割り当てられた最大メモリーをサポートするために必要な静的メモリーのオーバーヘッドが、予約済みメモリー容量または隠れたメモリー容量に影響を及ぼします。この静的メモリーのオーバーヘッドは、区画の最小メモリー・サイズにも影響を与えます。

区画に割り当てられた最小メモリー・サイズは、区画のみの再始動により変更することができます。ただし、最大メモリー・サイズを変更する場合は、システム全体の再始動が必要であり、最小メモリー値の増加が必要になる場合もあります。

「マネージメント・セントラル」を使用して、ある論理区画のメモリーを別の論理区画に移動するには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「マネージメント・セントラル」を展開します。
2. 「区画があるシステム」を展開します。
3. 処理する論理区画がある物理システムを選択します。
4. 論理区画を右マウス・ボタンでクリックし、「区画の構成」を選択します。ここからは「論理区画の構成」ウィンドウでの作業となります。
5. メモリーを移動する移動元の区画を選択します。
6. 「メモリー」を右マウス・ボタンでクリックし、「移動」を選択します。
7. 移動するメモリーの量を「移動するメモリー」で指定します。この値は、現在その論理区画で使用可能なメモリー量よりも小さくなければなりません。移動元と移動先の両方の区画に対する「移動後のメモリー」の値は、メモリーのために指定された最小値/最大値の範囲内に収める必要があります。

8. そのメモリーを受け取る区画を「**移動先論理区画**」で選択します。
9. 「**OK**」をクリックして、指定したメモリーを移動します。

「ユーザー接続」を使用して、ある論理区画のメモリーを別の論理区画に移動するには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「**ユーザー接続**」またはご使用のアクティブな環境を展開します。
2. システムの 1 次区画を選択します。
3. 「**構成およびサービス**」を展開し、「**論理区画**」を選択します。
4. 「**論理区画**」を右マウス・ボタンでクリックし、「**区画の構成**」を選択します。ここからは「論理区画の構成」ウィンドウでの作業となります。
5. メモリーを移動する移動元の区画を選択します。
6. 「**メモリー**」を右マウス・ボタンでクリックし、「**移動**」を選択します。
7. 移動するメモリーの量を「**移動するメモリー**」で指定します。この値は、現在その論理区画で使用可能なメモリー量よりも小さくなければなりません。移動元と移動先の両方の区画に対する「**移動後のメモリー**」の値は、メモリーのために指定された最小値/最大値の範囲内に収める必要があります。
8. そのメモリーを受け取る区画を「**移動先論理区画**」で選択します。
9. 「**OK**」をクリックして、指定したメモリーを移動します。

「保守ツール」ウィンドウを使用して、ある論理区画のメモリーを別の論理区画に移動するには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「**ユーザー接続**」またはご使用のアクティブな環境を選択します。
2. タスクパッド・ウィンドウの「**iSeries ナビゲーター保守ツール**」ウィンドウをオープンします。」を選択します。タスクパッド・ウィンドウが表示されない場合は、「**表示**」、「**タスクパッド**」と選択します。
3. 接続したい保守ツールのネットワーク・インターフェースの **IP アドレス**を入力します。「**OK**」をクリックします。
4. **保守ツールのユーザー ID およびパスワード**を入力するためのプロンプトが出されます。
5. システム名を展開し、「**論理区画**」を選択します。
6. 論理区画を右マウス・ボタンでクリックし、「**区画の構成**」を選択します。ここからは「論理区画の構成」ウィンドウでの作業となります。
7. メモリーを移動する移動元の区画を選択します。
8. 「**メモリー**」を右マウス・ボタンでクリックし、「**移動**」を選択します。
9. 移動するメモリーの量を「**移動するメモリー**」で指定します。この値は、現在その論理区画で使用可能なメモリー量よりも小さくなければなりません。移動元と移動先の両方の区画に対する「**移動後のメモリー**」の値は、メモリーのために指定された最小値/最大値の範囲内に収める必要があります。
10. そのメモリーを受け取る区画を「**移動先論理区画**」で選択します。
11. 「**OK**」をクリックして、指定したメモリーを移動します。

対話式パフォーマンスの動的な移動

システム全体を再始動することなく、論理区画間で値を変更できるように、対話式パフォーマンスをセットアップすることができます。最大値と最小値で、区画を再始動することなく入力することのできる値の範囲を指定します。論理区画の対話式パフォーマンスの制限範囲を変更する場合には、その区画を再始動する必要があります。

対話式パフォーマンスの最小値には、論理区画をサポートするために必要な対話式パフォーマンスの最少量と同じ値を指定できます。最大値は、システム上で使用可能な対話式パフォーマンスの量よりも小さくなければなりません。

ご使用のシステムには、システムのタイプやプロセッサ数に基づいた対話式パフォーマンスの特定の量があります。対話式パフォーマンスとは、ユーザーがコンピューターと対話する（プロンプトに対して応答する）量のことをいいます。対話はバッチ（ユーザー介入は必要ない）と対比することができます。

システムに対する対話式パフォーマンスの量（CPW）を考慮して、それぞれの論理区画に対して何パーセントを使用可能にするかを決定する必要があります。それぞれの論理区画の対話式パフォーマンスの合計は100%を超えてはなりません。

「マネージメント・セントラル」を使用して、ある論理区画の対話式パフォーマンスを別の論理区画に移動するには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「マネージメント・セントラル」を展開します。
2. 「区画があるシステム」を展開します。
3. 処理する論理区画がある物理システムを選択します。
4. 論理区画を右マウス・ボタンでクリックし、「区画の構成」を選択します。ここからは「論理区画の構成」ウィンドウでの作業となります。
5. 対話式パフォーマンスを移動する移動元の区画を選択します。
6. 「対話式パフォーマンス」を右マウス・ボタンでクリックし、「移動」を選択します。
7. 移動する対話式パフォーマンスの量を「移動する量」で指定します。この値は、現在その論理区画で使用可能な対話式パフォーマンスの量よりも小さくしなければなりません。移動元と移動先の両方の区画に対する「移動後」の値は、両方の区画に対する対話式パフォーマンスのために指定された最小値/最大値の範囲内に収める必要があります。
8. 対話式パフォーマンスを受け取る区画を「移動先—論理区画」で選択します。
9. 「OK」をクリックして、指定した量の対話式パフォーマンスを移動します。

「ユーザー接続」を使用して、ある論理区画の対話式パフォーマンスを別の論理区画に移動するには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「ユーザー接続」またはご使用のアクティブな環境を展開します。
2. システムの1次区画を選択します。
3. 「構成およびサービス」を展開し、「論理区画」を選択します。
4. 「論理区画」を右マウス・ボタンでクリックし、「区画の構成」を選択します。ここからは「論理区画の構成」ウィンドウでの作業となります。
5. 対話式パフォーマンスを移動する移動元の区画を選択します。
6. 「対話式パフォーマンス」を右マウス・ボタンでクリックし、「移動」を選択します。
7. 移動する対話式パフォーマンスの量を「移動する量」で指定します。この値は、現在その論理区画で使用可能な対話式パフォーマンスの量よりも小さくしなければなりません。移動元と移動先の両方の区画に対する「移動後」の値は、両方の区画に対する対話式パフォーマンスのために指定された最小値/最大値の範囲内に収める必要があります。
8. 対話式パフォーマンスを受け取る区画を「移動先—論理区画」で選択します。
9. 「OK」をクリックして、指定した量の対話式パフォーマンスを移動します。

「保守ツール」ウィンドウを使用して、ある論理区画の対話式パフォーマンスを別の論理区画に移動するには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「ユーザー接続」またはご使用のアクティブな環境を選択します。
2. タスクパッド・ウィンドウの「**iSeries ナビゲーター保守ツール**」ウィンドウをオープンします。」を選択します。タスクパッド・ウィンドウが表示されない場合は、「表示」、「タスクパッド」と選択します。
3. 接続したい保守ツールのネットワーク・インターフェースの **IP アドレス**を入力します。「OK」をクリックします。
4. **保守ツールのユーザー ID およびパスワード**を入力するためのプロンプトが出されます。
5. システム名を展開し、「**論理区画**」を選択します。
6. 論理区画を右マウス・ボタンでクリックし、「**区画の構成**」を選択します。ここからは「論理区画の構成」ウィンドウでの作業となります。
7. 対話式パフォーマンスを移動する移動元の区画を選択します。
8. 「**対話式パフォーマンス**」を右マウス・ボタンでクリックし、「**移動**」を選択します。
9. 移動する対話式パフォーマンスの量を「**移動する量**」で指定します。この値は、現在その論理区画で使用可能な対話式パフォーマンスの量よりも小さくなければなりません。移動元と移動先の両方の区画に対する「**移動後**」の値は、両方の区画に対する対話式パフォーマンスのために指定された最小値/最大値の範囲内に収める必要があります。
10. 対話式パフォーマンスを受け取る区画を「**移動先—論理区画**」で選択します。
11. 「**OK**」をクリックして、指定した量の対話式パフォーマンスを移動します。

論理区画のリソース移動のスケジュール

メモリー、プロセッサ、対話式パフォーマンス、および入出力プロセッサの移動をスケジュールすることができます。タスクは即時に実行するように選択することも、後で実行するように選択することもできます。論理区画のスケジューリング機能を使用すると、変化するワークロードやリソースに対する要求に柔軟に対応することができます。

スケジュールされた LPAR の移動を正しく動作させるためには、専用保守ツール (DST) および OS/400 セキュリティ要件が満たされている必要があります。

リソースの移動が行われるシステムの 1 次区画では、パスワード・サポートを使用するために DST パスワード・レベルが設定されていなければなりません。DST パスワード・レベルを変更するには、次のステップに従ってください。

1. DST からオプション 5「DST 環境の処理」を選択します。
2. オプション 6「保守ツール機密保護データ」を選択します。
3. オプション 6「パスワード・レベル」を選択します。
4. Enter キーを押して、パスワード・レベルの変更を確認します。

DST ユーザー ID に対する新規の暗号化レベルを適用するために、DST ユーザー ID パスワードは、DST パスワード・レベルが設定された後に変更される必要があります。この ID は、同じ OS/400 ユーザー・プロファイルが英大文字にしたものです。たとえば、「OS/400 ユーザー/パスワード = 'BOB'/'mypass'」ならば「DST ユーザー = 'BOB'/'MYPASS'」である必要があります。DST ユーザー・プロファイルには、次の権限が必要です。

1. システム区画 - 操作
または
2. システム区画 - 管理

OS/400 ユーザー・プロファイルには、次の特殊権限が必要です。

1. *ALLOBJ - 全オブジェクト権限
2. *SERVICE - 保守権限

セントラル・システムおよびリソースの移動が行われるシステムには同一の OS/400 ユーザー・プロファイルが存在していなければなりません。マネージメント・セントラルのデフォルトでは、セントラル・システムへのサインオンのために使用されるユーザー・プロファイルは、それぞれのエンドポイント・システムと同じパスワードを持つ必要があります。詳しくは、マネージメント・セントラルのプロパティのセキュリティ・タブにある「エンドポイント・システム上にパスワードが必要」についてのヘルプを参照してください。

LPAR リソースの移動はスケジュールされ、セントラル・システムにアクセスするために使用される OS/400 ユーザー・プロファイルで実行されます。

保守ツール・サーバーがターゲット・サーバー上で使用可能でなければなりません。保守ツール・サーバーを使用可能にするには、次のステップに従ってください。

1. OS/400 のコマンド行から、ADDSRVTBLE (サービス・テーブル項目の追加) と入力し、Enter キーを押します。「サービス・テーブル項目の追加」画面が表示されます。
2. 以下の情報を入力します。
 - サービス: 'as-sts'
 - ポート: 3000
 - プロトコル: 'tcp'
 - テキスト: 'Service Tools Server'
このフィールドはオプションですが、テーブル項目の説明を入力することを強くお勧めします。
 - **F10** (追加のパラメーター) を押してください。
 - 別名: 'AS-STS'
別名は**必ず**大文字にしてください。テーブルの検索の中には、大文字小文字の区別をするものがあります。
3. Enter キーを押してテーブル項目を追加します。
4. F3 を押して、「サービス・テーブル項目の追加」画面を終了します。
5. ENDTCP (TCP/IP の終了) と入力します。
6. STRTCP (TCP/IP の開始) と入力します。
7. いったんアクティブになると、サービス・テーブル項目が除去されるまで、TCP/IP が開始されるときに保守ツール・サーバーが始動します。

重要: このサーバーはセキュリティ上の理由から出荷時は使用不可になっています。デフォルトの DST ユーザー ID およびパスワード (QSECOFR、QSRV、11111111、または 22222222) をまだ持っているマシン上では、このサービスを使用可能にするべきではありません。これらの DST プロファイルはよく知られたものであり、このネットワーク・サービスは認証のために DST のセキュリティを使用するため、潜在的なセキュリティの脆弱性が発生する恐れがあります。

スケジューリング・サポートは QYHCHCOP API を使用します。

論理区画の特定のリソース移動のスケジューリングについて詳しくは、以下の項目を参照してください。

- 専用プロセッサ移動のスケジューリング
- 共用プロセッサ移動のスケジューリング

- 対話式パフォーマンス移動のスケジュール
- 入出力プロセッサ移動のスケジュール
- メモリー移動のスケジュール

メモリー移動のスケジュール

区画を作成する際には、その区画に対してメモリーを整数のメガバイト単位で追加する必要があります。1次区画には最低 256 MB、2次区画には最低 128 MB のメモリーが必要です。ワークロードの要求によっては、区画に対してメモリーの追加が必要になることがあります。メモリー移動のスケジュール機能を使用することで、区画に対するメモリー要求を調整できます。

「マネージメント・セントラル」を使用してメモリーの移動をスケジュールするには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「マネージメント・セントラル」を展開します。
2. 「区画があるシステム」を展開します。
3. 処理する論理区画がある物理システムを選択します。
4. 論理区画を右マウス・ボタンでクリックし、「区画の構成」を選択します。ここからは「論理区画の構成」ウィンドウでの作業となります。
5. 「メモリー」を右マウス・ボタンでクリックし、「移動」を選択します。
6. 移動するメモリーの量を「移動するメモリー」で指定します。
7. 「スケジュール」をクリックして、いつ移動させるのかを指定します。
8. このフィールドについて詳細が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。
9. 「OK」をクリックします。

「ユーザー接続」を使用してメモリーの移動をスケジュールするには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「ユーザー接続」またはご使用のアクティブな環境を展開します。
2. システムの 1 次区画を選択します。
3. 「構成およびサービス」を展開し、「論理区画」を選択します。
4. 「論理区画」を右マウス・ボタンでクリックし、「区画の構成」を選択します。ここからは「論理区画の構成」ウィンドウでの作業となります。
5. 「メモリー」を右マウス・ボタンでクリックし、「移動」を選択します。
6. 移動するメモリーの量を「移動するメモリー」で指定します。
7. 「スケジュール」をクリックして、いつ移動させるのかを指定します。
8. このフィールドについて詳細が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。
9. 「OK」をクリックします。

「保守ツール」ウィンドウを使用してメモリーの移動をスケジュールするには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「ユーザー接続」またはご使用のアクティブな環境を選択します。
2. タスクパッド・ウィンドウの「iSeries ナビゲーター保守ツール」ウィンドウをオープンします。」を選択します。タスクパッド・ウィンドウが表示されない場合は、「表示」、「タスクパッド」と選択します。
3. 接続したい保守ツールのネットワーク・インターフェースの IP アドレスを入力します。「OK」をクリックします。

4. 保守ツールのユーザー ID およびパスワードを入力するためのプロンプトが出されます。
5. システム名を展開し、「論理区画」を選択します。
6. 論理区画を右マウス・ボタンでクリックし、「区画の構成」を選択します。ここからは「論理区画の構成」ウィンドウでの作業となります。
7. 「メモリー」を右マウス・ボタンでクリックし、「移動」を選択します。
8. 移動するメモリーの量を「移動するメモリー」で指定します。
9. 「スケジュール」をクリックして、いつ移動させるのかを指定します。
10. このフィールドについて詳細が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。
11. 「OK」をクリックします。

専用プロセッサ移動のスケジュール

専用プロセッサとは、単一区画専用のプロセッサ全体を示します。専用プロセッサは、特定の論理区画に関する処理を扱います。変化するワークロードに対する調整のために、専用プロセッサの移動をスケジュールすることができます。

「マネージメント・セントラル」を使用して専用プロセッサの移動をスケジュールするには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「マネージメント・セントラル」を展開します。
2. 「区画があるシステム」を展開します。
3. 処理する論理区画がある物理システムを選択します。
4. 論理区画を右マウス・ボタンでクリックし、「区画の構成」を選択します。ここからは「論理区画の構成」ウィンドウでの作業となります。
5. 移動する専用プロセッサを右マウス・ボタンでクリックし、「移動」を選択します。
6. 移動する専用プロセッサの数を「移動する量」で指定します。
7. 「スケジュール」をクリックして、いつ移動させるのかを指定します。
8. このフィールドについて詳細が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。
9. 「OK」をクリックします。

「ユーザー接続」を使用して専用プロセッサの移動をスケジュールするには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「ユーザー接続」またはご使用のアクティブな環境を展開します。
2. システムの 1 次区画を選択します。
3. 「構成およびサービス」を展開し、「論理区画」を選択します。
4. 「論理区画」を右マウス・ボタンでクリックし、「区画の構成」を選択します。ここからは「論理区画の構成」ウィンドウでの作業となります。
5. 移動する専用プロセッサを右マウス・ボタンでクリックし、「移動」を選択します。
6. 移動する専用プロセッサを「移動する量」で指定します。
7. 「スケジュール」をクリックして、いつ移動させるのかを指定します。
8. このフィールドについて詳細が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。
9. 「OK」をクリックします。

「保守ツール」ウィンドウを使用して専用プロセッサの移動をスケジュールするには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「**ユーザー接続**」またはご使用のアクティブな環境を選択します。
2. タスクパッド・ウィンドウの「**iSeries ナビゲーター保守ツール**」ウィンドウをオープンします。」を選択します。タスクパッド・ウィンドウが表示されない場合は、「**表示**」、「**タスクパッド**」と選択します。
3. 接続したい保守ツールのネットワーク・インターフェースの **IP アドレス**を入力します。「**OK**」をクリックします。
4. **保守ツールのユーザー ID およびパスワード**を入力するためのプロンプトが出されます。
5. システム名を展開し、「**論理区画**」を選択します。
6. 論理区画を右マウス・ボタンでクリックし、「**区画の構成**」を選択します。ここからは「論理区画の構成」ウィンドウでの作業となります。
7. 移動する専用プロセッサを右マウス・ボタンでクリックし、「**移動**」を選択します。
8. 移動する専用プロセッサを「**移動する量**」で指定します。
9. 「**スケジュール**」をクリックして、いつ移動させるのかを指定します。
10. このフィールドについて詳細が必要な場合は、「**ヘルプ**」をクリックします。
11. 「**OK**」をクリックします。

共用プロセッサ移動のスケジュール

共用プロセッサ・プールによって、論理区画に対してプロセッサの一部を割り当てることができます。物理プロセッサは共用プロセッサ・プールに保持され、論理区画間で共用されます。変化するワークロードに対応するために、共用処理装置の移動をスケジュールすることができます。

「**マネージメント・セントラル**」を使用して共用プロセッサの移動をスケジュールするには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「**マネージメント・セントラル**」を展開します。
2. 「**区画があるシステム**」を展開します。
3. 処理する論理区画がある物理システムを選択します。
4. 論理区画を右マウス・ボタンでクリックし、「**区画の構成**」を選択します。ここからは「論理区画の構成」ウィンドウでの作業となります。
5. 移動する共用プール・プロセッサを右マウス・ボタンでクリックし、「**移動**」を選択します。
6. 共用プロセッサ・プール内の移動する装置数を「**移動する量**」で指定します。
7. 「**スケジュール**」をクリックして、いつ移動させるのかを指定します。
8. このフィールドについて詳細が必要な場合は、「**ヘルプ**」をクリックします。
9. 「**OK**」をクリックします。

「**ユーザー接続**」を使用して共用プロセッサの移動をスケジュールするには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「**ユーザー接続**」またはご使用のアクティブな環境を展開します。
2. システムの 1 次区画を選択します。
3. 「**構成およびサービス**」を展開し、「**論理区画**」を選択します。
4. 「**論理区画**」を右マウス・ボタンでクリックし、「**区画の構成**」を選択します。ここからは「論理区画の構成」ウィンドウでの作業となります。
5. 移動する共用プール・プロセッサを右マウス・ボタンでクリックし、「**移動**」を選択します。
6. 共用プロセッサ・プール内の移動する装置数を「**移動する量**」で指定します。

7. 「スケジュール」をクリックして、いつ移動させるのかを指定します。
8. このフィールドについて詳細が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。
9. 「OK」をクリックします。

「保守ツール」ウィンドウを使用して共用プロセッサの移動をスケジュールするには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「ユーザー接続」またはご使用のアクティブな環境を選択します。
2. タスクパッド・ウィンドウの「**iSeries ナビゲーター保守ツール**」ウィンドウをオープンします。」を選択します。タスクパッド・ウィンドウが表示されない場合は、「表示」、「タスクパッド」と選択します。
3. 接続したい保守ツールのネットワーク・インターフェースの **IP アドレス**を入力します。「OK」をクリックします。
4. **保守ツールのユーザー ID およびパスワード**を入力するためのプロンプトが出されます。
5. システム名を展開し、「**論理区画**」を選択します。
6. 論理区画を右マウス・ボタンでクリックし、「**区画の構成**」を選択します。ここからは「論理区画の構成」ウィンドウでの作業となります。
7. 移動する共用プール・プロセッサを右マウス・ボタンでクリックし、「**移動**」を選択します。
8. 共用プロセッサ・プール内の移動する装置数を「**移動する量**」で指定します。
9. 「スケジュール」をクリックして、いつ移動させるのかを指定します。
10. このフィールドについて詳細が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。
11. 「OK」をクリックします。

対話式パフォーマンス移動のスケジュール

対話式パフォーマンスの最小値には、論理区画をサポートするために必要な対話式パフォーマンスの最少量と同じ値を指定できます。最大値は、システム上で使用可能な対話式パフォーマンスの量よりも小さくなければなりません。対話式パフォーマンス移動のスケジュール機能を使用することで、区画に対する対話要求を調整できます。

「マネージメント・セントラル」を使用して対話式パフォーマンスの移動をスケジュールするには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「マネージメント・セントラル」を展開します。
2. 「**区画があるシステム**」を展開します。
3. 処理する論理区画がある物理システムを選択します。
4. 論理区画を右マウス・ボタンでクリックし、「**区画の構成**」を選択します。ここからは「論理区画の構成」ウィンドウでの作業となります。
5. 対話式パフォーマンスを移動する移動元の区画を選択します。
6. 移動する対話式パフォーマンスを右マウス・ボタンでクリックし、「**移動**」を選択します。
7. 「スケジュール」をクリックして、いつ移動させるのかを指定します。
8. このフィールドについて詳細が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。
9. 「OK」をクリックします。

「ユーザー接続」を使用して対話式パフォーマンスの移動をスケジュールするには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「ユーザー接続」またはご使用のアクティブな環境を展開します。

2. システムの 1 次区画を選択します。
3. 「構成およびサービス」を展開し、「論理区画」を選択します。
4. 「論理区画」を右マウス・ボタンでクリックし、「区画の構成」を選択します。ここからは「論理区画の構成」ウィンドウでの作業となります。
5. 対話式パフォーマンスを移動する移動元の区画を選択します。
6. 移動する対話式パフォーマンスを右マウス・ボタンでクリックし、「移動」を選択します。
7. 「スケジュール」をクリックして、いつ移動させるのかを指定します。
8. このフィールドについて詳細が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。
9. 「OK」をクリックします。

「保守ツール」ウィンドウを使用して対話式パフォーマンスの移動をスケジュールするには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「ユーザー接続」またはご使用のアクティブな環境を選択します。
2. タスクパッド・ウィンドウの「**iSeries ナビゲーター保守ツール**」ウィンドウをオープンします。」を選択します。タスクパッド・ウィンドウが表示されない場合は、「表示」、「タスクパッド」と選択します。
3. 接続したい保守ツールのネットワーク・インターフェースの **IP アドレス**を入力します。「OK」をクリックします。
4. 保守ツールのユーザー ID およびパスワードを入力するためのプロンプトが出されます。
5. システム名を展開し、「論理区画」を選択します。
6. 論理区画を右マウス・ボタンでクリックし、「区画の構成」を選択します。ここからは「論理区画の構成」ウィンドウでの作業となります。
7. 対話式パフォーマンスを移動する移動元の区画を選択します。
8. 移動する対話式パフォーマンスを右マウス・ボタンでクリックし、「移動」を選択します。
9. 「スケジュール」をクリックして、いつ移動させるのかを指定します。
10. このフィールドについて詳細が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。
11. 「OK」をクリックします。

論理区画への新規ハードウェアのインストール

区画に分割された環境に新規ハードウェアをインストールするときは、以下の事項に注意してください。

- 論理区画構成が現行であるか確認する。LPAR 構成から非報告リソースの消去を行うことが必要な場合があります。
- 共有バス上の空いている位置は、区画によって所有されない場合がある。共有バスの空いている位置は、新規アダプターをインストールする前に要求区画に割り当てる必要があります。
- 新規装置を所有するのは、その装置が接続されている入出力プロセッサ (IOP) を所有する論理区画である。
- 新規 IOP または IOA は、専用バスを所有する区画によって所有される。
- 新規 IOP または IOA は、共有バスの空いている位置を所有する区画によって所有される。
- 1 次区画は、新規システム・バスを所有する。
- 新規プロセッサおよびメモリーは、区画に割り当てるために使用できる (非割り当て)。
- 新規ディスク装置をシステムに追加または除去するときは、その装置の区画構成データの消去を行うことが必要な場合がある。

- 新規の対話式 CPW は、作成ウィザードで指定されたパーセンテージで、区画間で割り当てられる。アップグレード後は、区画で必要となる量よりも多くの対話式 CPW が区画に割り当てられないように十分確認する。

IBM は、以下のステップを実行して IOP または IOA をインストールする方法をお勧めします。

1. 非報告の論理区画リソースの消去オプションを使用して、使用不可になったリソース、重複してリストされているリソース、またはサーバーに存在していないリソースを除去する。
2. 空いている位置を要求区画に割り当てる。
3. 『お客様がインストール可能なフィーチャー (CIF)』情報を使用して、新規ハードウェアをインストールする。

1 次区画への新規ソフトウェア・リリースのインストール

1 次区画によって要求される最小メモリーは、新規の OS/400 ソフトウェア・リリースをインストールする場合に変化することがあります。最小メモリーの値が不十分な場合、論理区画の構成エラーが発生することがあります。それぞれの区画に対する最小および最大のメモリー値を変更するには iSeries ナビゲーターを使用します。

OS/400 のインストールについて詳しくは、『OS/400 リリースおよび関連ソフトウェアのインストール』を参照してください。

区画環境での拡張装置の移行

区画に分割されたサーバーの拡張装置移行を始める前には、詳細な計画が必要です。論理区画のすべての構成処理は LPAR の訓練を受けた担当者が行うことを強くお勧めします。

以下の機構の移行に関する詳細な説明については、『区画に分割されたサーバーでの拡張装置の移行』を参照してください。

- 5065 から 5074 への機構移行
- 5066 から 5079 への機構移行
- 5075 から 5074 への機構移行

共用プロセッサ・プールを使用する区画に対する HVLPTask パフォーマンスの振る舞い

共用プロセッサ・プールを使用する区画に対し、タスクごとの CPU 稼働率を報告する WRKSYSACT などのパフォーマンス・ツールは、HVLPTASK というタスクにより消費される CPU 時間を表示します。

HVLPTASK は実 CPU 時間を消費しません。HVLPTASK は区画や、その区画内のジョブのパフォーマンスには影響を与えません。HVLPTASK により消費されている CPU 時間の表示は、計算上のものでしかありません。

HVLPTASK に対して報告される CPU 時間は、区画に割り当てられた処理能力の関数です。

HVLPTASK での計算に含まれる CPU 時間は、実際のジョブによって行われる作業量について計測されるので、システムの CPU 稼働率が、行われている作業量に比例して 0% から 100% まで適切に振る舞うようになっています。

例

区画 A、B、C にはそれぞれ順に 0.9、0.1、1.5 の処理装置の能力があります。区画 A、B はそれぞれ 1 つの仮想プロセッサを、区画 C は 2 つの仮想プロセッサを使用するように定義されています。

区画 A:

区画がアイドルのとき、HVLPTASK は CPU 時間の 0% を消費しています。区画内の実際のジョブによって消費される CPU 時間が 0 から 0.9 (許可されている最大の CPU リソース) までの処理装置の能力になるにつれて、報告される区画のシステム CPU 稼働率は 0% から 100% まで変化します。HVLPTASK に対して報告される CPU 稼働率は 0% から 10% まで変化し、実際のジョブに対して報告される CPU 稼働率は 0% から 90 % まで変化します。

区画 B:

区画がアイドルのとき、HVLPTASK は CPU 時間の 0% を消費しています。区画内の実際のジョブによって消費される CPU 時間が 0 から 0.1 (許可されている最大の CPU リソース) までの処理装置の能力になるにつれて、報告される区画のシステム CPU 稼働率は 0% から 100% まで変化します。HVLPTASK に対して報告される CPU 稼働率は 0% から 90% まで変化し、実際のジョブに対して報告される CPU 稼働率は 0% から 10 % まで変化します。

区画 C:

区画がアイドルのとき、HVLPTASK は CPU 時間の 0% を消費しています。区画内の実際のジョブによって消費される CPU 時間が 0 から 1.5 (許可されている最大の CPU リソース) までの処理装置の能力になるにつれて、報告される区画のシステム CPU 稼働率は 0% から 100% まで変化します。HVLPTASK に対して報告される CPU 稼働率は 0% から 25% まで変化し、実際のジョブに対して報告される CPU 稼働率は 0% から 75 % まで変化します。

上記の例からわかるように、HVLPTASK により消費される CPU 時間は、構成された処理能力と区画内の仮想プロセッサ数の、両方の関数となっています。

例外

1. WRKACTJOB は、ジョブについてのみの CPU 稼働率を表示するため、HVLPTASK によって消費される CPU 時間は表示しません。
2. PM/400 は、報告される上位 20 のジョブのリストから HVLPTASK を除外します。

説明

有効なシステム CPU 時間が共用プロセッサの区画の OS/400 およびアプリケーションに報告される際には、物理 CPU を他の区画と共用している区画で計算が行われていることが CPU 稼働率計算において考慮されず計測されます。CPU 時間の計測はシステム CPU 時間についてのみ行われ、個別タスクの CPU 時間については行われません。このため、タスクによって消費されていると報告される有効な CPU 時間の合計とシステムによって消費されていると報告される有効な CPU 時間との間にずれが生じます。このずれを解決するために、システム全体の CPU 時間の計測が原因で生じる超過 CPU 時間が、HVLPTASK での計算に含まれています。

タスクの CPU 時間を計測しないことの理論的根拠としては、タスクが消費した実際の CPU 時間に基づく既存の測定基準があるため、タスクの CPU 時間の計測をすることで、その測定基準が不明確になるからです。そのような測定基準の例としては、任意のジョブが完了するために必要な CPU 時間の合計があります。タスクの CPU 時間も計測された場合、1 つのジョブが消費した CPU 時間の合計は、区画に割り当てられた構成済みの能力 (処理装置) の関数になります。

論理区画を持つシステムの再始動および電源遮断

システム全体や 1 区画だけで、初期プログラム・ロード (IPL) の実行または電源遮断の実行をすることが必要な場合があります。

1 次区画で IPL を実行するときには、すべての 2 次区画でも IPL が実行されることに注意する必要があります。システム IPL での 2 次区画の開始について詳しくは、『2 次論理区画の再始動』、および『2 次論理区画の再始動の防止』を参照してください。

1 次区画の電源を遮断すると、実行中のすべての 2 次区画も電源が遮断されます。1 次区画より前に 2 次区画の電源を遮断しないと、まだ実行中の 2 次区画は異常 IPL します。

異常 IPL についての詳細は、「iSeries システム操作の基本」を参照してください。

実行可能な IPL タスクは次のとおりです。

- 論理区画の電源スケジュールの変更。
- 1 次区画での時刻の変更。
- システムの電源遮断。
- システムの再始動。
- 論理区画の操作モードの変更。
- 論理区画の IPL ソースの変更。
- システム再始動時の 2 次論理区画の再始動。
- システム再始動時の 2 次論理区画の再始動の防止。

論理区画の電源スケジュールの変更

IPL 日付/時刻 (QIPLDATTIM) システム値を変更することによって、2 次区画の電源をオンおよびオフにする時間をスケジュールすることができます。iSeries ナビゲーターのマネージメント・セントラルで、QIPLDATTIM システム値を変更することができます。

2 次区画コンソールのコマンド行で、GO POWER または CHGPWRSCD コマンドを使用して、2 次区画の電源スケジュールを変更します。

2 次区画の電源をオンにするようにスケジュールするときには、1 次区画がすでにオンになっているときだけ 2 次区画をオンにするようにしてください。2 次区画の電源をオンにする前に、1 次区画の電源をオンにする必要があります。

電源スケジュールについて詳しくは、「iSeries システム操作の基本」を参照してください。

1 次区画での時刻の変更

以下の情報は 1 次区画のみに当てはまります。

1 次区画で時刻を変更する際には、すべての 2 次区画で電源がオンになっていることを確認してください。これにより、確実にそれぞれの 2 次 IPL 装置に対する構成データが適切に更新されるようになります。

1 次区画で時刻が変更されたときに、2 次区画の電源が遮断されていた場合には、システム参照コード A6005090 800140A が発生することがあります。

このエラーを解決するには、手動モードでサーバーに対して IPL を実行して、IPL 装置データを受け入れてください。IPL 装置データの受け入れについては、『論理区画の IPL 装置としてのディスク装置の受け入れ』を参照してください。

論理区画を持つシステムの電源遮断

2 次区画の電源遮断

2 次区画の電源は、OS/400 システム電源遮断 (PWRDWN SYS) コマンドを使用すると正しく遮断できます。

その 2 次区画のコンソールのコマンド行で、PWRDWN SYS OPTION (*CNTRLD) DELAY (600) と入力して、Enter キーを押します。

2 次区画の電源を遮断しても、他の論理区画には影響しません。このコマンドは、2 次区画の電源を遮断する際によく使用されます。

1 次区画の電源遮断

1 次区画の電源を遮断する前に、すべての 2 次区画の電源を遮断します。それから、PWRDWN SYS コマンドを使用して 1 次区画の電源を遮断します。

V5R2 から、PWRDWN SYS コマンドでの確認のサポートのセットアップが可能になりました。これをセットアップすると、2 次区画がアクティブであるときに 1 次区画の電源を遮断しようとする、確認が求められるようになります。1 次区画の PWRDWN SYS コマンドのデフォルトをコマンド行で変更するには、ADDENVVAR と入力して Enter キー を押します。環境変数は QIBM_PWRDWN SYS_CONFIRM です。

1 次区画のコンソールのコマンド行で、PWRDWN SYS OPTION (*CNTRLD) DELAY (600) と入力して、Enter キーを押します。

1 次区画より前に 2 次区画の電源を遮断しないと、アクティブな 2 次区画はすべて異常に電源が遮断されます。

区画マネージャーにより、2 次区画で変更されたデータの、メモリーからディスク装置への書き込みの試行が可能です。ただし、オペレーティング・システムは、通常のジョブ終了に達することはできません。このような 2 次区画の次の IPL は、異常 IPL として処理され、完了まで長い時間がかかります。

遅延電源オフ

遅延電源オフ (リモート・コントロール・パネルの電源ボタン) は、論理区画の電源を遮断する必要があるのに PWRDWN SYS コマンドが動作しない場合にのみ使います。

遅延電源オフのオプションを使用すると、事前定義した時間の間待ってから、区画の電源が遮断されます。これにより、区画がジョブを終了する時間ができ、ディスクにデータを書き込むことができます。事前に決定された時間内に区画が遮断できない場合は、異常終了し、次の再始動には長時間かかります。

即時電源オフ

即時電源オフ (リモート・コントロール・パネルの機能 8) は、PWRDWN SYS または遅延電源オフを使用して論理区画の電源を遮断できない場合にのみ使います。

リモート・コントロール・パネル画面から即時電源オフのオプションを使用すると、システムの電源は事前設定の遅延なしで遮断されます。これにより、論理区画の IPL は異常 IPL になり、データを損失する恐れがあります。

遅延電源オフまたは即時電源オフを実行するには、リモート・コントロール・パネルで作業する必要があります。電源ボタンは遅延電源オフを開始し、機能 8 はシステムの即時電源オフを開始します。専用保守ツール (DST) のシステム区画機能でリモート・コントロール・パネルを表示するには、操作権限または管理権限を持った保守ツールのユーザー ID が必要です。

リモート・コントロール・パネルの使用方法については、『コントロール・パネル機能』を参照してください。サーバーの再始動方法については、『システムの始動 (IPL)』を参照してください。

論理区画を持つシステムの再始動

システム全体を再始動する (電源遮断および初期プログラム・ロード (IPL) を実行する) には、2 次区画の電源を 1 次区画と一緒に遮断する必要があります。1 次区画を再始動するには、まずすべての 2 次区画の電源を遮断します。

他の 2 次区画に影響することなく 1 つの 2 次区画を再始動することができます。2 次区画の電源がオンの場合、PWRDWN SYS OPTION *CNTRLD DELAY (600) RESTART (*YES) を使用して再始動することができます。このコマンドをワークステーションでコマンド行から使用することも、iSeries ナビゲーターの「コマンドの実行」を使用することもできます。

2 次区画の状態	不在 IPL	在席 IPL
アクティブな OS/400 で稼働状態	<ol style="list-style-type: none"> 1. 論理区画のリモート・コントロール・パネルを使用して、通常モードを選択し、適切なソース (タイプ) を設定します。 2. 処理する論理区画を右マウス・ボタンでクリックし、「コマンドの実行」を選択します。 3. PWRDWN SYS OPTION (*CNTRLD) DELAY (600) RESTART (*YES) と入力し、「OK」をクリックします。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 論理区画のリモート・コントロール・パネルを使用して、手動モードを選択し、適切なソース (タイプ) を設定します。 2. 処理する論理区画を右マウス・ボタンでクリックし、「コマンドの実行」を選択します。 3. PWRDWN SYS OPTION (*CNTRLD) DELAY (600) RESTART (*YES) と入力し、「OK」をクリックします。
非アクティブな OS/400 で稼働状態	<ol style="list-style-type: none"> 1. 論理区画のリモート・コントロール・パネルを使用して、通常モードを選択し、適切なソース (タイプ) を設定します。 2. リモート・コントロール・パネルを使用し、電源ボタンをクリックします (遅延電源オフ)。 3. 区画が電源オフするのを待ちます。 4. リモート・コントロール・パネルを使用し、電源ボタンをもう一度クリックします。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 論理区画のリモート・コントロール・パネルを使用して、手動モードを選択し、適切なソース (タイプ) を設定します。 2. リモート・コントロール・パネルを使用し、電源ボタンをクリックします (遅延電源オフ)。 3. 区画が電源オフするのを待ちます。 4. リモート・コントロール・パネルを使用し、電源ボタンをもう一度クリックします。

2 次区画の状態	不在 IPL	在席 IPL
非稼働状態	<ol style="list-style-type: none"> 1. 論理区画のリモート・コントロール・パネルを使用して、通常モードを選択し、適切なソース (タイプ) を設定します。 2. リモート・コントロール・パネルを使用し、電源オン・ボタンをクリックします。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 論理区画のリモート・コントロール・パネルを使用して、手動モードを選択し、適切なソース (タイプ) を設定します。 2. リモート・コントロール・パネルを使用し、電源オン・ボタンをクリックします。

システム IPL での 2 次区画の開始について詳しくは、『2 次論理区画の再始動』を参照してください。

在席 IPL または不在 IPL の実行について詳しくは、「iSeries システム操作の基本」を参照してください。「オペレーション・コンソール」には、リモート・コントロール・パネルの追加情報が示されています。

論理区画の操作モードの変更

論理区画の操作モードは、論理区画のないシステムの操作モードと同じように動作します。操作モードの動作とモードを変更することが必要な理由については、『IPL の操作モード』を参照してください。

区画の操作モードを変更する場合は、リモート・コントロール・パネルで作業する必要があります。専用保守ツール (DST) のシステム区画機能には、操作権限または管理権限を持った保守ツールのユーザー ID が必要です。

区画の操作モードを変更する方法については、『操作モードと IPL タイプを変更する』を参照してください。

論理区画の IPL ソースの変更

各論理区画ごとに、別個の初期プログラム・ロード (IPL) のソース (タイプ) を選択することができます。論理区画を持つシステム上の各 IPL ソース (A、B、C、または D) は、論理区画のないシステム上と同様に機能します。

各 IPL ソースの動作と IPL ソースを変更する必要がある理由について詳しくは、『IPL タイプ』を参照してください。

重要: IPL ソース C を使用できるのは、ハードウェア・サービス技術員だけです。IPL ソース C は、サービス技術員の指導のもとでのみ使用するようになっています。この機能を不適切に使用すると、重大なデータ損失が生じる場合があります。

区画の IPL ソースを変更する場合は、リモート・コントロール・パネルで作業する必要があります。専用保守ツール (DST) のシステム区画機能でリモート・コントロール・パネルを使用するには、操作権限または管理権限を持った保守ツールのユーザー ID が必要です。

リモート・コントロール・パネルの使用方法については、『コントロール・パネル機能』を参照してください。区画の IPL ソースを変更する方法については、『操作モードと IPL タイプを変更する』を参照してください。

システム再始動時の 2 次論理区画の再始動

このオプションを選択すると、システム (1 次区画) の再始動または初期プログラム・ロード (IPL) を実行するときに自動的に開始するように、2 次論理区画を設定することができます。

この手順は、iSeries ナビゲーターから実行できます。専用保守ツール (DST) のシステム区画機能には、管理権限を持った保守ツールのユーザー ID が必要です。

「マネージメント・セントラル」を使用して、システム再始動時に 2 次論理区画を再始動するには、次のステップを実行します。

1. iSeries ナビゲーターで、「マネージメント・セントラル」を展開します。
2. 「区画があるシステム」を展開します。
3. 処理する論理区画がある物理システムを選択します。
4. 論理区画を右マウス・ボタンでクリックし、「プロパティ」を選択します。
5. 「オプション」ページを選択します。
6. 「1 次区画が再始動されたら自動的に再始動」ボックスを選択して、システム再始動時に自動的に 2 次区画を再始動するようにします。このフィールドについて詳細が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。
7. 「OK」をクリックします。

「ユーザー接続」を使用して、システム再始動時に 2 次論理区画を再始動するには、次のステップを実行します。

1. iSeries ナビゲーターで、「ユーザー接続」またはご使用のアクティブな環境を展開します。
2. システムの 1 次区画を選択します。
3. 「構成およびサービス」を展開し、「論理区画」を選択します。
4. 論理区画を右マウス・ボタンでクリックし、「プロパティ」を選択します。
5. 「オプション」ページを選択します。
6. 「1 次区画が再始動されたら自動的に再始動」ボックスを選択して、システム再始動時に自動的に 2 次区画を再始動するようにします。このフィールドについて詳細が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。
7. 「OK」をクリックします。

「保守ツール」ウィンドウを使用して、システム再始動時に 2 次論理区画を再始動するには、次のステップを実行します。

1. iSeries ナビゲーターで、「ユーザー接続」またはご使用のアクティブな環境を選択します。
2. タスクパッド・ウィンドウの「**iSeries ナビゲーター保守ツール**」ウィンドウをオープンします。」を選択します。タスクパッド・ウィンドウが表示されない場合は、「表示」、「タスクパッド」と選択します。
3. 接続したい保守ツールのネットワーク・インターフェースの **IP アドレス**を入力します。「OK」をクリックします。
4. **保守ツールのユーザー ID およびパスワード**を入力するためのプロンプトが出されます。
5. システム名を展開し、「論理区画」を選択します。
6. 論理区画を右マウス・ボタンでクリックし、「プロパティ」を選択します。
7. 「オプション」ページを選択します。

- 「1 次区画が再始動されたら自動的に再始動」ボックスを選択して、システム再始動時に自動的に 2 次区画を再始動するようにします。このフィールドについて詳細が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。
- 「OK」をクリックします。

システム再始動時の 2 次論理区画の再始動の防止

このオプションを選択すると、システム (1 次区画) の再始動または初期プログラム・ロード (IPL) を実行したときに、論理区画は始動しません。

この手順は、iSeries ナビゲーターから実行できます。専用保守ツール (DST) のシステム区画機能には、管理権限を持った保守ツールのユーザー・プロファイルが必要です。システム再始動時の 2 次論理区画の再始動を防止するには、次のステップを実行します。

「マネージメント・セントラル」を使用して、システム再始動時の 2 次論理区画の再始動を防止するには、次のステップを実行します。

- iSeries ナビゲーターで、「マネージメント・セントラル」を展開します。
- 「区画があるシステム」を展開します。
- 処理する論理区画がある物理システムを選択します。
- 論理区画を右マウス・ボタンでクリックし、「プロパティ」を選択します。
- 「オプション」ページを選択します。
- 「1 次区画が再始動されたら自動的に再始動」ボックスを選択解除して、システム再始動時に論理区画を再始動しないようにします。このフィールドについて詳細が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。
- 「OK」をクリックします。

「ユーザー接続」を使用して、システム再始動時の 2 次論理区画の再始動を防止するには、次のステップを実行します。

- iSeries ナビゲーターで、「ユーザー接続」またはご使用のアクティブな環境を展開します。
- システムの 1 次区画を選択します。
- 「構成およびサービス」を展開し、「論理区画」を選択します。
- 論理区画を右マウス・ボタンでクリックし、「プロパティ」を選択します。
- 「オプション」ページを選択します。
- 「1 次区画が再始動されたら自動的に再始動」ボックスを選択解除して、システム再始動時に論理区画を再始動しないようにします。このフィールドについて詳細が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。
- 「OK」をクリックします。

「保守ツール」ウィンドウを使用して、システム再始動時の 2 次論理区画の再始動を防止するには、次のステップを実行します。

- iSeries ナビゲーターで、「ユーザー接続」またはご使用のアクティブな環境を選択します。
- タスクパッド・ウィンドウの「iSeries ナビゲーター保守ツール」ウィンドウをオープンします。」を選択します。タスクパッド・ウィンドウが表示されない場合は、「表示」、「タスクパッド」と選択します。
- 接続したい保守ツールのネットワーク・インターフェースの IP アドレスを入力します。「OK」をクリックします。

4. 保守ツールのユーザー ID およびパスワードを入力するためのプロンプトが出されます。
5. システム名を展開し、「論理区画」を選択します。
6. 論理区画を右マウス・ボタンでクリックし、「プロパティ」を選択します。
7. 「オプション」ページを選択します。
8. 「1次区画が再始動されたら自動的に再始動」ボックスを選択解除して、システム再始動時に論理区画を再始動しないようにします。このフィールドについて詳細が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。
9. 「OK」をクリックします。



Printed in Japan